

目的 対人関係が人間の行動を左右することは多くの場面でみられるが、我々の研究目的とする被服行動についても対人志向性が何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられる。本報では、中村らが作成した対人的志向性尺度を用いて女子学生の被服行動を対人的志向性との関連から検討した。

方法 対人的志向性尺度(IOS-V)17項目、被服行動項目19項目を設定し、女子大生、女子短大生400名を対象に集合調査法による調査を行った。回答の形式は5段階評定とした。得られたデータより、まず対人的志向性尺度、被服行動項目をそれぞれ因子分析した後、対人的志向性については因子毎に評定得点を合計し、被験者を高、中、低の3グループに分けた。被服行動については、因子得点を算出し、3グループ間に被服行動の違いがあるかをみるため、因子得点を従属変数として一元配置の分散分析を行い、有意差検定をし考察した。

結果 対人志向性については、人間関係志向性、対人的関心・反応、個人主義傾向の3因子が抽出された。被服行動については、人・仲間重視因子、自己顕示・目立ち因子、おしゃれ・常識因子、機能性重視因子の4因子が抽出された。分散分析の結果、人間関係志向性の高いグループは、他人や仲間を意識した着装をし、常識的なおしゃれを好み、機能面も重視した被服行動をとっている。また、対人的関心・反応の高いグループは、他人や仲間を非常に気にしながら、おしゃれ・常識性をもった被服行動をとっているが、自己顕示や目立つ被服行動はとらないということが明かとなった。